YOSHI TAKE TAKA KI

吉武高木

―― 弥生時代埋葬遺跡の調査概要 ――

1986

福岡市教育委員会

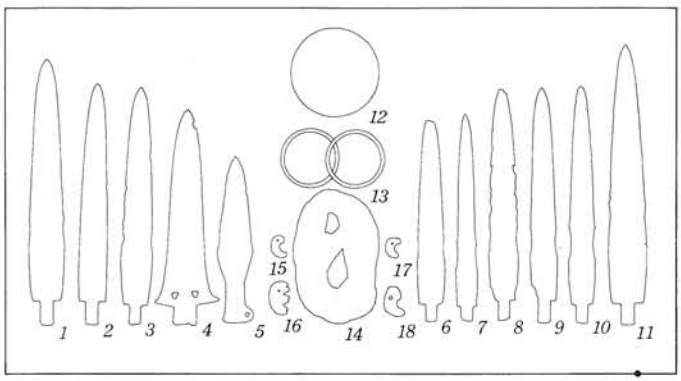
吉武高木遺跡出土

1～*3*・*6*～*11*：細形銅剣　*4*：細形銅戈　*5*：細形銅矛　*12*：多鈕細文鏡　*13*：銅釧　*14*：碧玉製管玉　*15*～*18*：翡翠製勾玉

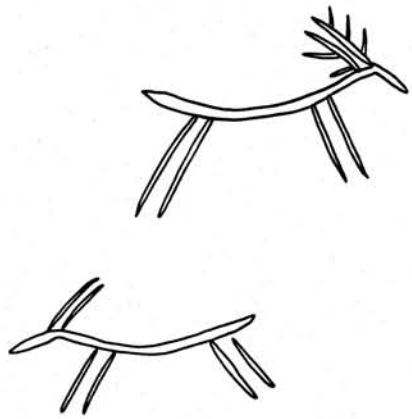
1・*2*・*4*・*5*・*12*・*16*：3号木棺墓　*3*：1
：4号木棺墓　*8*・*18*：2号木棺墓
号甕棺墓　*11*・*15*：K-117号甕棺墓
～3号木棺墓　K-109～K-111・

の青銅器と玉類

号木棺墓 *6*：K-116号甕棺墓 *7*
9：K-100号甕棺墓 *10*：K-115
13・*17*：K-110号甕棺墓 *14*：1
K-117号甕棺墓

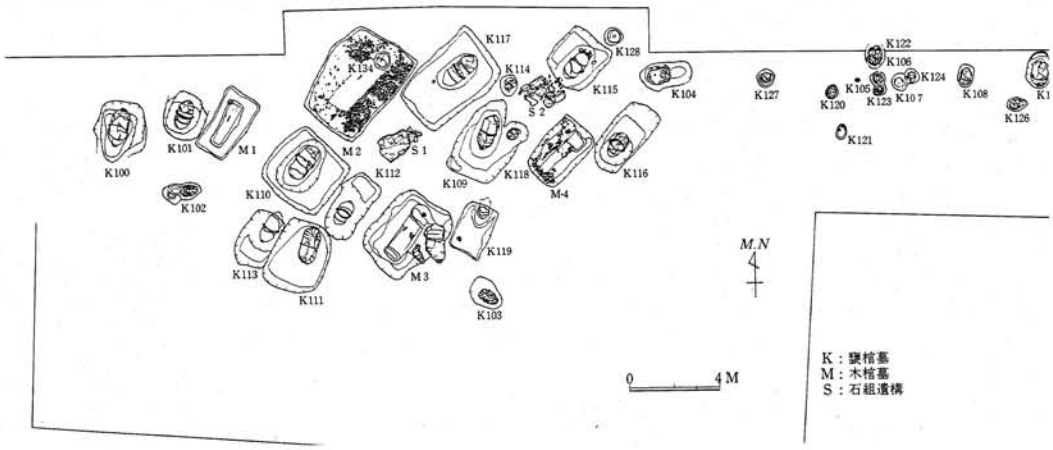


吉武高木遺跡近景



シカ線刻画（K-112号甕棺）

遺構配置図



序

福岡市西部の飯盛・吉武地区は福岡市でも有数の農業振興地域であり、昭和55年度から同地区の団体営圃場整備事業が進められております。

飯盛・吉武地区は背後に歴史性を秘めた飯盛山が聳え，周辺には古代からの埋蔵文化財が広く分布する地域であり、福岡市教育委員会では、遺跡の重要性を鑑み圃場整備によってやむを得ず破壊消滅してゆく埋蔵文化財について記録保存に努めているところであります。

本書は、昭和59年度に発掘調査した吉武高木遺跡を中心に、これまでに発掘調査した成果の概要を収録したものです。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚です。

調査に際しましては、福岡市飯盛・吉武土地改良区の方々をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜わりましたことに対し、心から感謝の意を表するものです。

昭和61年７月31日

福岡市教育委員会
教育長　佐藤善郎

目　次

Ⅰ　はじめに…… 1
Ⅱ　吉武高木遺跡の調査…… 3
Ⅲ　吉武遺跡群のこれまでの調査……10
Ⅳ　おわりに……15

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が西区『飯盛・吉武地区圃場整備事業』に伴って1984年度に緊急調査を行なった吉武遺跡群第Ⅳ次調査の概要報告である。
2．吉武遺跡群の全体的理解のため、第Ⅰ次～第Ⅴ次調査の概要も抄録した。
3．遺物写真は白石公高氏、英文要約は林田憲三氏にお願いした。
4．本書の執筆・編集は常松幹雄・下村智・横山邦継が協議・分担してこれを行なった。

題字は坂口雅風氏の揮毫による

I　はじめに

福岡市西部の早良(さわら)平野は、東を油山山塊、西を背振山から伸びる飯盛山・叶岳・長垂山などの山塊で界され、中央部に室見川が南北に貫流する。近年、人口の増大に伴って周辺の市街地が進行し開発が進んでいるが、西区大字飯盛・吉武地区はまだ田園地帯が広がっている地域である。

ところで、この地区では1980年度から農業振興のため団体営圃場整備事業を実施するよう計画された。福岡市教育委員会では、1978年度に同地区一帯を含む早良平野の詳細遺跡分布調査を行ない、同地区には各時期の埋蔵文化財が濃密に分布していることが明らかとなった（吉武遺跡群、高木遺跡群、太田遺跡群)。

そこで、福岡市教育委員会では、地元土地改良組合、市関係当局と埋蔵文化財の取り扱いについて協議をかさね、基本的には埋蔵文化財の保護を考慮し、盛土調整で遺構の削平を最少限にとどめるようになった。しかし、切り盛りの関係でどうしても削られる部分及び道路、水路部分については止むなく発掘調査で行なわざるを得なくなった。改良面積は全体で46ｈａを計り、それを7～10ｈａづつ年次計画で改良を進めることになった。発掘調査も年次計画に合せて行なった。

調査区は、室見川の左岸、飯盛山から派生する標高20～30ｍの扇状地にあたり、第１次調査は1981年から開始された。そして、1985年度の第５次調査まで含めると、約11万㎡の発掘調査を行なったことになる。内容的には後期旧石器時代の細石器文化から中世に亘る重要な遺構・遺物を調査している。今回報告する吉武高木遺跡は第４次調査にあたり、青銅器を多数副葬した弥生時代前期末から中期初頭にかけての特定集団の甕棺墓・木棺墓地である。その他、第３次調査では樋渡古墳々丘下に盛土をもち、青銅器・鉄器を副葬する特定甕棺墓地が発掘され、さらに第５次調査でも青銅器を多数副葬した甕棺墓・木棺墓が発掘されている。第１次調査から副葬青銅器の数を足してみると優に30例を越える。早良平野で古式の青銅器を出土した遺跡は、有田遺跡、飯倉唐木遺跡などが挙げられるが、それぞれ１例程度しか副葬していない。吉武高木遺跡を中心に、吉武大石遺跡、樋渡遺跡など多量の副葬品をもつ墓地群は、一体どういう意味を持つものであろうか。

吉武遺跡群位置図 (1/100,000)

II　吉武高木遺跡の調査

吉武高木遺跡の調査は1983年７月～1984年３月に行なわれ、吉武遺跡群第Ⅳ次調査にあたる。調査地点は標高25～26ｍの扇状地縁辺部に位置し、新設される幹線道路１号東端部にあたる。調査では路線内約 350 ㎡の範囲に甕棺墓34基（成人棺16・小児棺18基）、木棺墓４基が見付かった。これらの埋葬施設は分布の上で東半部に小児棺が多く、西半部に大型の成人甕棺・木棺墓が顕著である。特に西半部の埋葬施設では墓壙軸線が磁北より東へ30～45度程度ふれる方向をとり、殆ど重複なく整然と配列されている。埋葬施設のうち甕棺墓２基（K-110、117）以上、木棺墓３基（M-2～４）が花崗岩・安山岩礫を使用した『標石』を墓壙上部に残していた。副葬遺物は甕棺墓８基、木棺墓４基より出土し、器種・数量ともに豊富であり（Tab．1）、木棺墓の占める位置が特記される。また墓域はその後1985年７月の範囲確認調査の結果、北側に約20ｍ程のび、東西方向に長い楕円形を呈する約1500㎡程度の規模と考えられる。

遺構全景

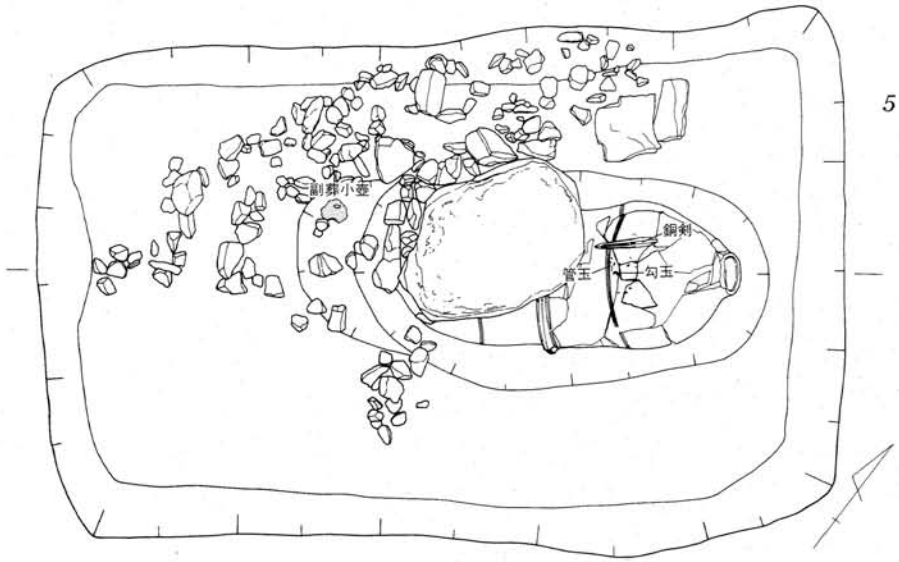
甕棺墓

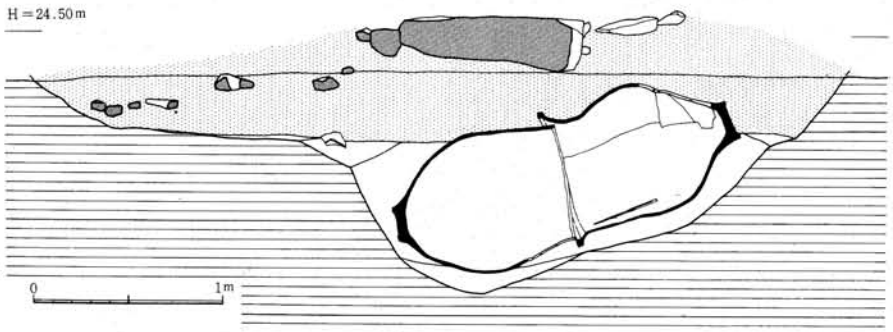
K-117号甕棺墓は、長軸約4.5mの墓壙に、口縁部を打ち欠いた下甕を上甕が呑むような格好になっている。各々の甕は口径75cm、器高は1m近くある。さらに棺の上には拳大の礫を交えた土を盛って、その上に花崗岩の標石を置いている。他の遺跡の同時期の甕棺墓とは比較にならない規模である。

器高65cmのK-112号甕棺は、下甕の口縁に近い胴部に鹿の線刻画が描かれている。素朴な力強いタッチで刻まれた二頭の鹿は、現代人に躍動感あふれる感動をもたらしてくれる。

これらの甕棺には、従来、北部九州の編年で「金海式」という型式名が充てられてきたが、副葬された壺形土器との関連をはじめ、時期や型式の細分など、検討すべき多くの課題が提起された。

K-110号甕棺墓（西から）





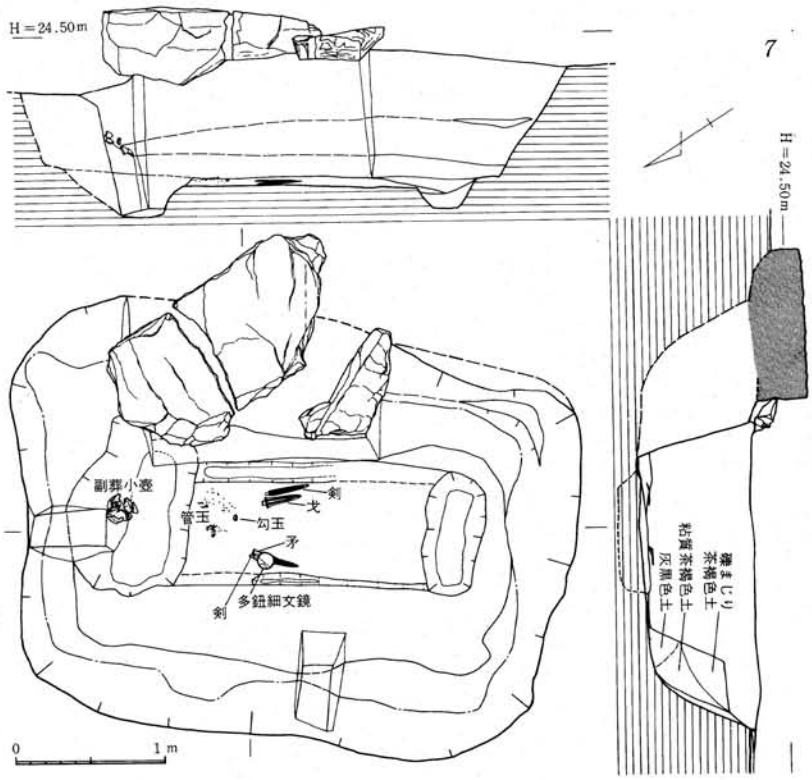
K－117号甕棺墓
実測図 (1/40)

K－117号甕棺墓
（北から）

木棺墓

甕棺墓と同じ配列で4基の木棺墓が出土した。2号木棺墓は中心的な位置を占め、墓壙長4m80cm、幅3m50cm、木棺長2m50cm、幅1mを測る。木棺底面はU字形を呈しており割竹形木棺と考えられる。墓壙内には拳大から人頭大の亜角礫を敷きつめ、特に東側は礫の面を揃え棺を縁取っている。1号木棺墓、4号木棺墓も棺床がU字形となり、4号木棺墓には棺の小口部、側辺部に亜角礫を詰め込む。3号木棺墓は両小口板を深く埋め込む組合式木棺墓で、他の木棺墓と形式が異なるが、吉武高木遺跡では多鈕細文鏡をはじめ最も副葬品の多い木棺墓である。また、2号・3号木棺墓には一枚石からなる花崗岩の標石、4号木棺墓には花崗岩・変成岩の礫を組みあわせた標石が載っている。

2号木棺墓
（南から）



3号棺墓実測図
(1/50)

3号木棺墓（南から）

出土遺物

吉武高木遺跡の出土遺物は、およそ青銅器、石器、玉類、副葬土器に大別することができる。

さらに青銅器は、剣・矛・戈などの武器、装身具である釧、鏡に分類できるが、分布は木棺墓や大型の甕棺墓に限られている。

勾玉と管玉の位置からすると遺物は木棺墓のみならず甕棺墓においても、ほぼ原位置を止めている。２号木棺墓の場合、首と推定される部分に長さが0.8㎝前後の管玉を配し、手首付近には長さが１㎝を超える管玉を巻いていたのではないかと思われる。

銅剣は、すべて先端を足元に向けているようであるが、K-117号甕棺では上甕に剣が置かれていることから、少なくとも埋葬時に腰に下げてはいなかったようである。

３号木棺墓は、多鈕細文鏡をはじめ３種４口の青銅利器、玉類が集中している。その中で銅矛と銅戈の片面には布が遺存していた。布目順郎氏の鑑定によると、これらの繊維は絹布で、しかも国産の可能性がつよいとのことである。吉武高木遺跡出土遺物は、青銅器や玉類の型式学的研究のみならず、共伴土器による時期的背景も交え、検討すべき多くの課題を含んでいる。

遺構	番号	土器型式	出土遺物	計測値(cm)	備考
甕棺墓	100	金海	細形銅剣 BⅠ式(1)	全長 29.8	関の一方を欠く
	109	金海	管玉(10)	長軸 0.7～0.9	碧玉製
	110	金海	銅釧(2)	外径 7.3 内径 6.6	断面は蒲鉾形
			勾玉(1)	長軸 2.5	ヒスイ製
			管玉(74)	長軸 0.7～1.1	碧玉製
	111	金海	管玉(92)	長軸 0.4～1.5	碧玉製
	115	金海(城ノ越)	細形銅剣 BⅠ式(1)	現存長 29.9	先端部を欠く
	116	金海(城ノ越)	細形銅剣 BⅠ式(1)	現存長 29.1	先端部を欠く
	117	金海	細形銅剣 BⅠ式(1)	全長 37.2	
			勾玉(1)	長軸 2.8	ヒスイ製
			管玉(42)	長軸 0.7～1.5	碧玉製
			ガラス小玉(1)	径 0.2	藍色
	125	金海	磨製石鏃(1)	全長 11.2	有茎式
木棺墓	1	(城ノ越)	細形銅剣 BⅠ式(1)	全長 29.7	
			管玉(20)	長軸 0.8～1.3	碧玉製
	2	(城ノ越)	細形銅剣 BⅡ式(1)	現存長 29.3	先端部を欠く
			勾玉(1)	長軸 3.5	ヒスイ製
			管玉(135)	長軸 0.5～1.6	碧玉製
	3	(城ノ越)	多鈕細文鏡(1)	直径 11.1	表面を上にして出土
			細形銅剣 BⅠ式(1)	全長 33.5	
			細形銅矛 A式(1)	全長 20.5	一方の面に絹布が付着
			細形銅剣 C式(1)	全長 30.2	
			細形銅戈 B式(1)	全長 27.1	一方の面に絹布が付着
			勾玉(1)	長軸 4.0	ヒスイ製
			管玉(95)	長軸 0.5～1.1	碧玉製
	4	(城ノ越)	細形銅剣 B式(1)	全長 26.0	

※土器型式および青銅器の分類は森貞次郎氏の論考にならった。土器形式の( )内は副葬土器。

Tab.1 吉武高木遺跡出土遺物一覧

3号木棺墓出土遺物

副葬土器一覧

1：K-131号甕棺墓

2：K-116号甕棺墓

3：K-119号甕棺墓

4：3号木棺墓

5：K-115号甕棺墓

6：4号木棺墓

7：K-104号甕棺墓

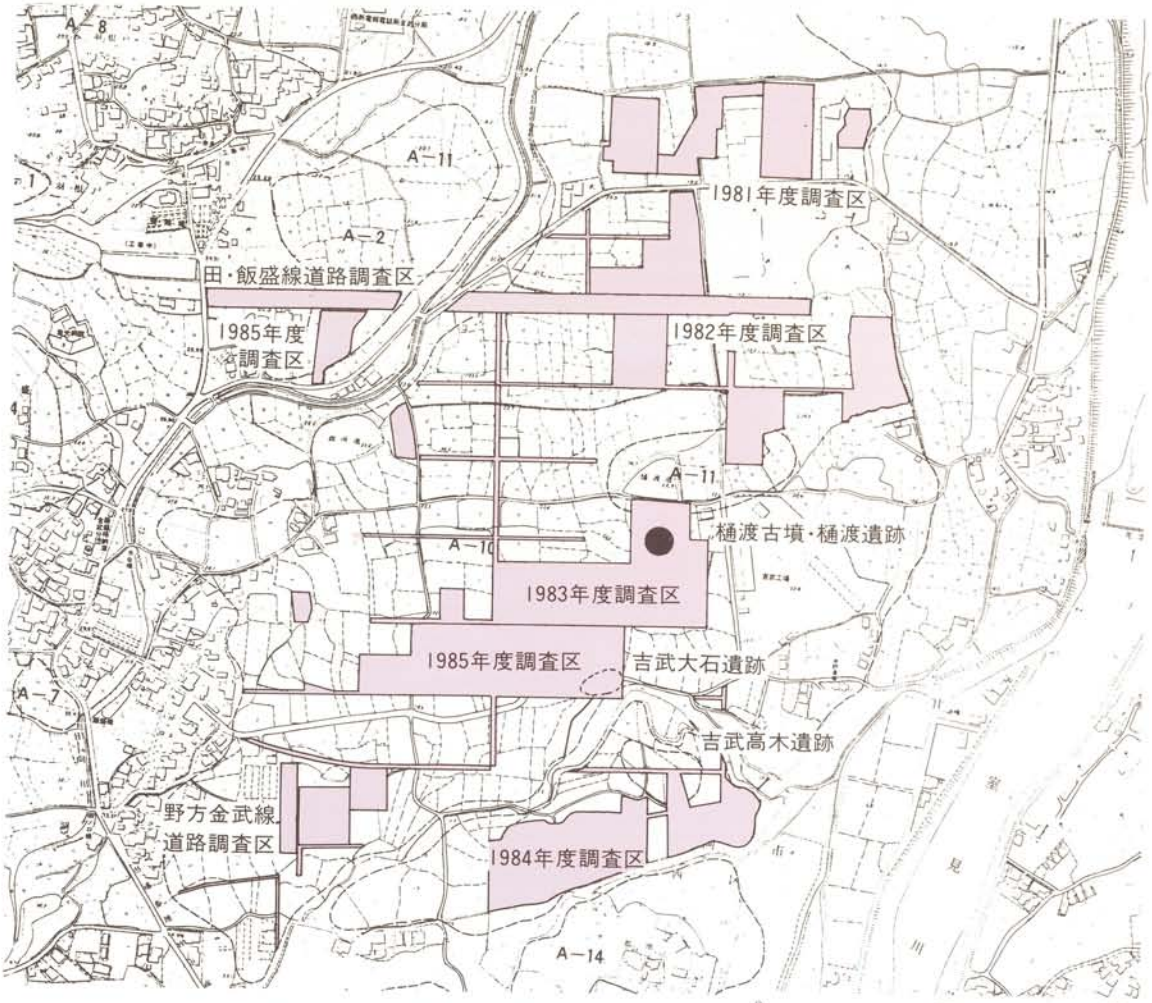
吉武高木遺跡出土副葬土器類

Ⅲ　吉武遺跡群のこれまでの調査

1　第Ⅰ次・Ⅱ次調査（1981・82年度）

1981年度の第Ⅰ次調査では、面積 12000 m²を調査。主に弥生時代の墓地群と集落群が検出されている。甕棺群は2群以上に分れ、金海式甕棺墓を含む中期後半までの甕棺墓 200 基以上が出土。金海式甕棺墓からは細形銅剣の切先、板付Ⅱ式の副葬小壺が出土している。集落は弥生前期末～中期の方形や円形の竪穴住居址、弥生後期の竪穴住居址（石剣・石戈出土）などが確認されている。集落から単独に銅戈の鋳型も出土している。

1982年度の第Ⅱ次調査では20000 m²以上調査し、縄文後期の貯蔵穴47基、弥生中期の甕棺墓2基、円形住居址数軒を検出した。中心的な遺構は5Ｃ～6Ｃにかけての掘立柱建物群60棟以上、不定形土壙群80基以上である。この土壙群からは多量の須恵器・土師器が出土している。



吉武遺跡群　第Ⅰ～第Ⅴ次調査区位置図

2　第Ⅲ次調査（1983年度）

第Ⅲ次調査は遺跡群のほぼ中央にあたり、8地区25000㎡に及ぶ。調査で検出した遺構は古墳時代中期掘立柱建物44棟・土壙122基以上・前方後円墳（全長40m）・方墳1基・円墳2基、弥生時代中期～後期甕棺墓140基・石蓋土壙墓・箱式石棺墓・木棺墓各1基などであるが、このうち前方後円墳後円部墳丘下に見付かった一群の弥生中期後半代墓地は甕棺墓25基以上、木棺墓・箱式石棺墓各1基からなる『墳丘墓』である。

墳丘は形状が不詳ながら長径23～24m・墳高2～2.5mを有し、豊富な副葬品（Tab.2）が出土し弥生時代国家成立期の社会的状況を墓制で辿る上から注目される。

樋渡遺跡
K-75号甕棺墓
（東から）

樋渡古墳（西から）

遺構	番号	土器型式	出土遺物( )数量	計測値(cm)	備考
甕棺墓	5号	須玖	鉄剣((1)	現存長 36.5	関上部に目釘穴 推定長 40.0cm
			鉄鏃(1)	全長 3.0	無茎式
	61号	須玖	鉄剣(1)	全長 25.0	関上部に目釘穴
	62号	立岩	前漢鏡〈重圏文星雲鏡〉(1)	直径 8.3	博山炉形鈕 前漢尺 3寸
			素環頭太刀(1)	現存長 34.0	
	64号	立岩	素環頭刀子(1)	全長 22.5	環頭一部破損
	75号	須玖	細形銅剣 BII式(1)	全長 36.0	把頭飾と対をなす
			十字形把頭飾(1)	全高 5.0 最大幅 6.5	緊縛の紐残存
	77号	須玖	細形銅剣 BI式(1)	全長 34.0	絹布付着
			鍔金具(1)	残存長 2.5	破片、杏仁形
木棺墓	1号	(後期)	鉄剣(1)	全長 22.0	
			管玉(14)		碧玉・輝緑凝灰岩
			ガラス小玉(36)		コバルトブルー
			水晶製算盤玉(2)		濃紺
単独出土		(中期後半)	細形銅剣 C式(1)	全長 31.0	

※土器型式および青銅器の分類は森貞次郎氏の論考にならった。

Tab. 2 樋渡遺跡出土遺物一覧

樋渡遺跡出土遺物

3　第Ⅳ次調査（1984年度）

弥生時代の埋葬遺構としては、吉武高木の南に金海式を主体とする25基からなる甕棺群があり、2基より磨製石鏃と磨製石剣が出土した。また南西に150 mの位置にも金海式からなる34基の一群がある。西に400 mでは、前期末から後期はじめにかけての甕棺墓、約500基の調査を行ない、中期末の甕棺墓から素環頭太刀が出土した。弥生時代の墓地と集落、生産基盤の所在などについて、多くの課題が投げかけられた。

第Ⅳ次東調査区
（西から）

第Ⅳ次西調査区
（西から）

4　第Ⅴ次調査（1985年度）

吉武高木の北西に位置する大石遺跡の調査では、前期末から中期後半にかけての甕棺墓約200、木棺墓6、土壙墓13基が検出された。

高木遺跡とほぼ同時期の埋葬遺構のうち、1号木棺墓の銅戈は、側板にほぼ直角の位置にあることから着柄のまま埋められていた可能性がある。45号甕棺の矛には柄の一部、5号木棺墓の剣には鞘が残っている。

遺跡	番号	土器型式	出土遺物　（ ）数量	計測値(cm)	備　考
甕棺墓	1	金　海	細形銅戈	――	先端に近い樋の部分
	10	金　海	磨製石鏃(1)	全長 3.5	無茎式
	45	金　海	細形銅剣ＢⅠ式(1) 細形銅矛(1)	全長　28.6 全長　31.3	矛の袋部より木柄
	51	金　海	細形銅剣ＢⅠ式(1) 碧玉製管玉(11)	全長　31.3 長軸0.4～0.6	
	53	汲　田	細形銅戈Ａ式(1) 磨製石剣切先(4)	全長　21.0	
	60	金　海	磨製石剣切先(1)		
	67	金　海	細形銅矛(1)	現存長 18.4	先端部を欠く
	70	金　海	細形銅戈(1)		刃部に鋭ぎ分けあり
	71	金　海	青銅器片(1)		把頭飾の可能性あり
	81	金　海	磨製石剣先端部(1)		
	140	金　海	細形銅剣ＢⅡ式(1)	全長31.5	
木棺墓	1	（城ノ越）	細形銅剣ＢⅡ式(1) 細形銅戈Ｂ式(1)	現存長　28.9 現存長　31.5	先端部を欠く
	5		細形銅剣ＢⅡ式(1)	現存長　30.6	木製の鞘を存す

※土器型式および青銅器の分類は森貞次郎氏の論考にならった。土器型式(　)内は覆土出土土器。

Tab.3　吉武大石遺跡出土遺物一覧

吉武大石遺跡　K-45号甕棺墓

Ⅳ　おわりに

1981年以来５次に亘る吉武遺跡群の調査はこれまで十分明らかでなかった早良平野の歴史的遺跡像を一挙に具体化する内容であったといえる。

以下では本遺跡群における高木遺跡の特徴を再記し、他の地区との比較をもって若干の考察としたい。

① **墓地の分布**　吉武遺跡群ではこれまで10群以上で総数1200基を越える弥生時代前期末～後期初頭の甕棺墓・木棺墓が調査され、群規模では数十基から数百基のものまであるが、これらの埋葬施設の中で副葬品および顕著な外部施設の有無が一般的共同体構成員と他のものとの現象的差異であるとすれば、特定集団墓地としての墓地群は高木地区(第Ⅳ次)とこの北西 150 mに位置する大石地区(第Ⅴ次)および高木の北 250 mにあたる樋渡地区(第Ⅲ次)の３群となろう。このうち樋渡地区の一群は明らかに『墳丘』を有するのに対して高木・大石地区では墓地を限定する

吉武遺跡群弥生時代墓地
分布図

明確なものは無い。更にこれらは時期的に高木・大石（前期末～中期前半）→樋渡（中期後半）と推移し、中期中葉を中心とする頃の特定集団墓地を現在見出すことができない。

② **埋葬施設**　吉武高木遺跡では墓域全体を表象・区別する明確な遺構はないが、墓地廃絶以降の周辺部生活遺構の分布状況から考えると成人用埋葬施設には墓壙上に大型標石、墓域にはこれを画する為の何らかの施設があった可能性がある。次に甕棺墓地における４基の木棺墓の占める位置はその規模と葬法・副葬品の構成の上で特徴的である。特に第２号木棺墓は掘方規模の長・短辺長4.8×3.5ｍ、深さ0.7ｍをはかり、木棺は長・短辺長が2.5×1.0ｍ程度と考えられ、第1・4号木棺墓を含めて底面は断面半円形をなす。同様に甕棺墓ではK-100・110・111・117号が掘方規模・甕棺法量において突出している。

③ **副葬品**　吉武高木遺跡では甕棺墓８基・木棺墓４基から副葬遺物が出土した（Tab.１）。甕棺墓は全て金海式甕棺であり、副葬剣は最古式ＢⅠ式細形銅剣である。またこの他に有茎式磨製石鏃・翡翠製勾玉・銅釧などの副葬例があり、この時期のガラス小玉の出土は特記される。また木棺墓では全体的に共通するものは細形銅剣で、ＢⅡ・Ｃ式も混在する。他には碧玉製管玉・翡翠製勾玉が３基に通有であって、特に３号木棺墓には細形銅剣（２），細形銅戈、細形銅矛、多鈕細文鏡１面という副葬があり、器種が武器・装身具に限られているとはいえ非常な分量といえる。他に木棺墓の全て、および甕棺墓４基から副葬小壺が出土したが、これらは特に前期末とされる金海式土器の型式分類・編年観に有効な役割を果すことが十分考えられる。

一方第Ⅴ次調査にかかる大石地区では金海式甕棺墓11基・木棺墓２基から細形銅剣（５）・細形銅戈（４）・細形銅矛（２）・磨製石剣切先(7)などが出土しており、武器形青銅器の総量は高木地区を凌いでいるが、同時にまた玉類が極端に少なく、特に翡翠製勾玉の副葬が見出されていない点は大きな違いといえる。

吉武高木遺跡は紀元前２世紀を前後する時期に位置づけられ、将来された青銅武器・鏡などはその故地である朝鮮半島の政治的動向と当然密接な関わりを持っていると考えられ、これから墓地の被葬者とその階層性、ひいては北部九州における小平野の地域的統一過程を追究する上で多くの材料を提供しよう。

Summary

The Yoshitake (吉武) Sites are located in the southwest of Sawara (早良) Plain that spreads over the northwest of Fukuoka Prefecture.

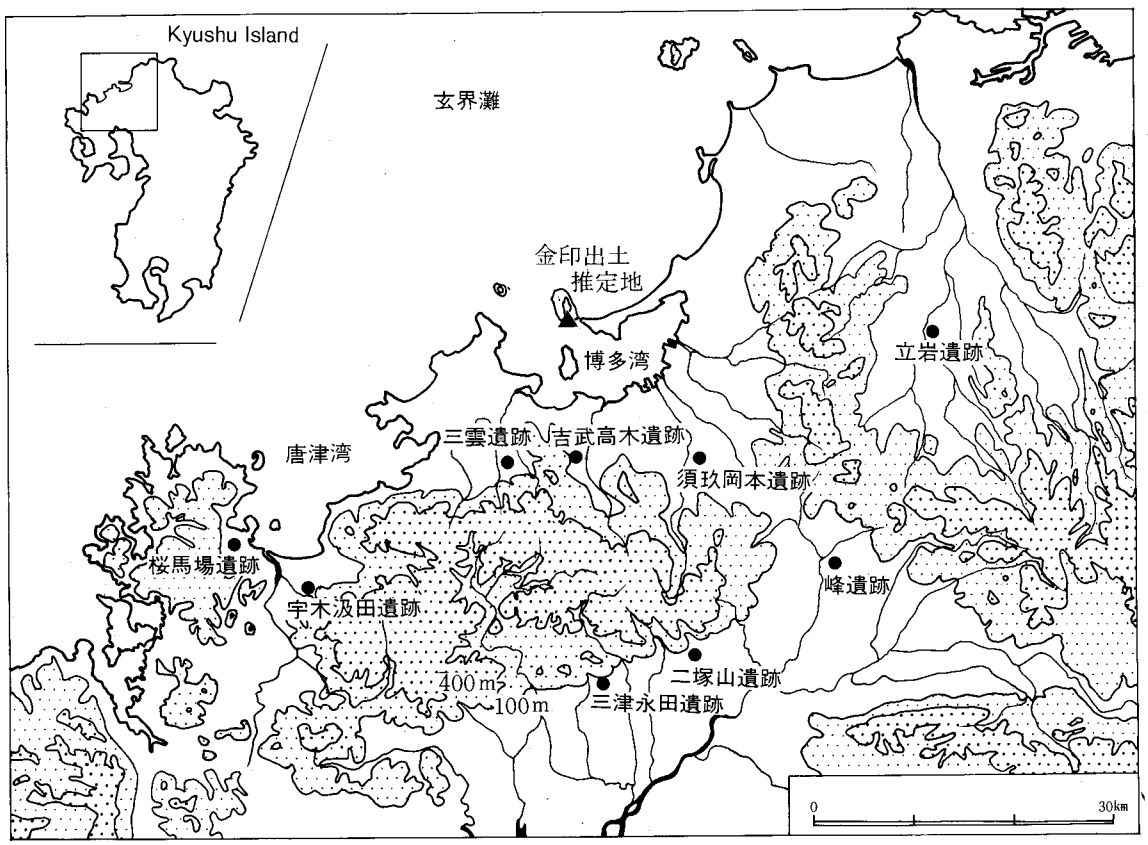
We designate one of the areas for rescue archaeology during the 1984 campaign "Yoshitake-Takaki (高木) Site." As a result of the excavation, we found graves with many offerings. Above all, the discovery of No.3 wooden sarcophagus has been taken much notice. A bronze millor found in it is called "bronze millor with two nobs" (多鈕細文鏡) in shape. And other offerings found in burial jars and wooden sarcophagi are 9 bronze daggers, 1 bronze spear, 1 bronze gē (戈), 4 jade pendants (勾玉), and 469 gems.

The vases unearthed with them belong to the date from the end of the Early Yayoi period to the beginning of the Middle Yayoi period.

During the campaign of 1983, at Hiwatashi (樋渡) Site, a burial mound was unearthed, which is dated to the late phase of the Middle Yayoi period. Some of burial jars and a wooden sarcophagus have offerings; 3 bronze daggers, 3 iron daggers, 1 iron knife, 1 iron arrowhead, 1 bronze pommel, 1 bronze millor of the Early Han Dynasty (重圏文星雲鏡) and 52 gems.

During the campaign of 1985, at Ohishi (大石) Site, about 200 burial jars and wooden sarcophagi were excavated. Graves dating from the end of the Early Yayoi period to the biginning of the Middle Yayoi period have many offerings; 6 bronze daggers, 2 bronze spears, 4 bronze gēs (戈) and 11 gems.

We confirm that not only Yoshitake-Takaki Site but also two other sites offer significant knowledge for studying the stages of the Yoyoi period and the relationship among China, the Korean Peninsula, and Japan.



北部九州主要弥生墳墓群位置図 (1/750,0000)

多鈕細文鏡
吉武高木遺跡３号木棺墓

THE STUDY OF YOSHITAKE-TAKAKI SITE
Graves in the Yayoi Period
By
The Board of Education of Fukuoka-City
1986

吉武高木

—弥生時代埋葬遺跡の調査概要—

1986年７月31日

発行　福岡市教育委員会 歴史資料館
　　福岡市中央区天神1丁目15番30号

印刷　株式会社　西日本新聞印刷

吉武高木
—弥生時代埋葬遺跡の調査概要—
福岡市教育委員会 歴史資料館